

Nippon Bauhaus Society
Bauhaus
 Bauhaus magazine

竹皮編みに見られる
 タウトの理念

群馬県ふるさと伝統工芸士会理事
 前島 美江

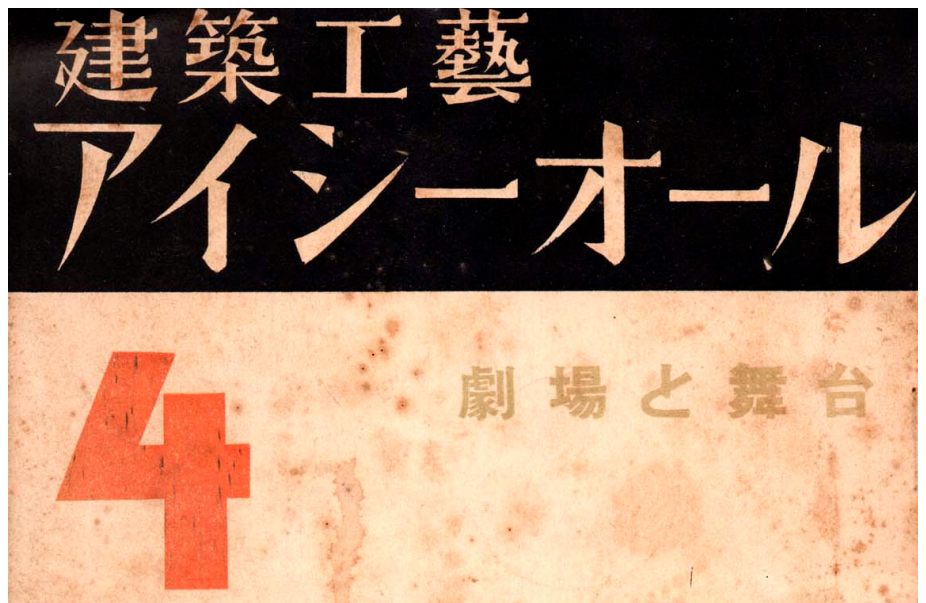


図 1

・タウトを招いた頃の高崎の状況

1929年、[1]井上房一郎（以下井上と表記）がパリから帰国してから高崎では井上を中心に新しい工芸運動を展開し始めている。

木工、竹工、漆工、染織、などの事業化を手始めに研究がなされデザイン化を進め職人の養成や製品の販売までもプロデュースし、優れた工芸理念を大衆に提供しようとしていた。この理念はタウトとも共通の方向を向いていたと思われる。当時のこの井上の地域工芸運動の協力者としてはバウハウス留学から帰国した[2]山脇巖、道子や建築工芸アイ・シー・オール（図1）という機関誌でバウハウスを紹介した[3]川喜多煉七郎、後に[4]自由学園に工芸研究所を立ち上げた山室光子、今井和子、織、染などを指導していた蜂須賀年子などがいた。

因みに1933年4月に東京高等工芸学校木材工芸科に入学したの[5]渡辺力(以下渡辺と表記)は山脇道子のバウハウスの

手織物展を資生堂ギャラリーで見て感銘を受けている。その夏に渡辺は川喜多煉七郎が設立した新建築工芸学院の夏期講座を受講している。おそらくアイ・シー・オールのバウハウス特集号も見ていたと思われる。

・タウトを迎えた高崎の工芸運動と竹皮編み

1930年調査による高崎市の主要生産物（年産5万円以上のもの）を記していくと、その中に紡績、生糸、木工品、漆器、下駄表、絹織物などが挙げられている。井上の父[6]保三郎の着手していた簾の下駄表を作るという副業会の事業を引き継ぐ形で井上は活動を開始している。当時、高崎商工会会頭を引き受けていた保三郎の奔走により1921年にすでに前橋に設置されていた群馬県工業試験場に見合う施設を高崎にも、と新設されたのが群馬県工業試験場高崎分場である。井上は地域にある生産物を生かして「生活と美術」を融合させようという考え方

で新方式を取り入れ、木工品を組合で買上げて配分することで成り立たせようとした高崎木工配分組合や、絹の改良を進めるタスパン株式会社などで広幅銘仙の製作、漆工品等の生産を実現させている。井上等は、1934年、タウトを招いたことで活性化し、公的機関である高崎分場の研究機能を生かし、井上工房の試作品を産みだすのである。少林山達磨寺の講堂でタウトは助手を務める青年たちを教育しながら、洗心亭（図2）で6枚もののデッサンを描いている。木工、竹工、竹皮編み、漆工、染織工、ガラス製品、鋳物等の試作品は地元の工場や工房で次々と製作されている。

・竹皮編みの誕生

タウトが竹皮編みをデザインしたのは1934年の夏頃だったと推定される。「ある日私達は高崎駅近くの町を歩いていたらタウトさんがこの町は雰囲気、他と違って見えるという。私はタウトさんにここは高崎南部表の職人の町だから

[1] 井上房一郎（1898～1993）1988年12月に井上は前島の竹皮編み展で「竹皮編みは私のやってきた事業でした」といながら竹皮編み製品を注文した。

[2] 山脇巖、道子(1898～1987,1910～2000)1930年からバウハウスに夫婦で留学。帰国後タウトと親交を持つ。巖の舞台美術の仕事との関わりでタウトと日向氏とのつながりができたと思われる。道子発案の手織り機は高崎の木工配分組合で製作された。

[3] 川喜多煉七郎（1902～1975）遠藤新事務所勤務。1930年ウクライナのハリコフ劇場のコンペに入選。1932年銀座に新建築工芸研究所を創設。バウハウスに習った造形教育を行う。建築工芸アイ・シー・オールという機関誌を発行、タウトの著作の特集を組む。井上工房の活動も紙面で紹介する。

[4] 自由学園(1921～)羽仁吉一、もと子夫妻により始まった。1903年自由学園から創刊された「婦人之友」にはタウトの建築散歩の記事やエリカのドイツ料理の記事を掲載。

[5] 渡辺力（1911～2013）剣持勇、柳宗理らと共に日本におけるモダンデザインの礎を創った。1954年、グロピウス来日の折、林邸を案内。

[6] 井上保三郎（1868～1938）地域産業資本家として高崎の近代化に尽くした。

[7] 水原徳言（1911～2009）井上の高崎の工芸運動に参加。タウトと井上の仲立ちをして、タウトの信頼を得る。中原とタウトの竹皮編みの誕生に立ち会う。タウト離日後も竹皮編みの復興に努め、一時は、400人もの職人が従事する産業に育てあげた



図2 撮影者：小池 隆 - Own work少林山達磨寺の洗心亭



図3



図4

らです。と説明したのです。」[7]水原徳言より聞き書き1989年11月19日前島記) タウトが来群する前から新しい輸出品を作ろうということで、当時南部表を製造していた組合の中堅技術者だった[8]中原泰護氏が選ばれて担当したそうだ。タウトと中原が共同制作し新しく創りあげたのが竹皮編みだったのである。南部表に用いられていた[9]カシロダケという日本産の竹皮を用いて工芸用畳針を使ってコイリング〈巻き編み〉という技法で編み上げるのが竹皮編みである。タウトと井上の合意の承認印を押されたタウトデザインの工芸品は銀座に新設された[10]ミラテスで販売された。その中でも竹皮編みは売り上げが伸びたと記録されている。

・群馬工芸所の出来た頃の様子

1936年、4月タウトを日本に招いた上野伊三郎を所長に[11]群馬工芸所が新設される。当時を振り返って渡辺はこ

う語っている。「私はタウトさんがいらしたから群馬に行ったのです。ミラテスには見習いとして2〜3ヶ月勤め群馬工芸所にもタウトさんがおられた時在籍していました。ある時、私が井上氏のデザインしたパイプ製の椅子の図面を清書しているとタウトさんが肩越しに図面を覗き込んで『君は金属のモノをデザインしてはいけません。群馬にはもっと木や竹という地元の良い素材があるでしょう』と強く言い放ったのです。・・中略・・やがてタウトさんが群馬を去るということで私も東京へもどったのです。」後に日本のデザイン界の礎を築くことになる若き日の渡辺の証言である。(渡辺より聞き書き2005年12月前島記)

・高崎のバウハウスを目指して

ヴァルター・グロピウスとタウトの出会いや青年期に遡る。二人は[12]ドイツ工作連盟や1919年に立ち上げた[13]芸術労働評議会でも共に同志として

活動してきた。やがてグロピウスを校長として創設されたバウハウスの教育理念は建築を最終目標に、諸芸術の統合を目指し、造形の本質を追求したものだ。タウトもこの理念を根底において群馬でも教育者としての活動を開始する。

[14]蔵田周忠の東京高等工芸学校の三人の生徒、眞井、原田、磯村は少林山の講堂に泊りながらタウトから教示を受ける。その時の様子を[15]眞井邦雄の日記より抜粋する。

「細い線継ぎ継ぎの線は禁止された。線はガッチリ太く正しく力強く描くことを強調された。・・中略・・鉛筆は4B以上6B程度に替えられた。我々はタウトの去った後心身の疲労でグッタリして暫く言葉もなく茫然と顔を見合わせていた。完全にたたきのめされてしまったのだ。複雑な精神状態であった。・・中略・・感服があった。これからだという腹があった。描きかけの図面はタウトによって破られたものを再び我々自身の手によって現実に破り去られる運命を持った。

[8] 中原泰護 20代の頃、高崎南部表の中堅技師だったがタウトとの出会いで新しい工芸、「竹皮編み」を作り上げた。後に、中原の城南工房(図3)で沢山の後継者を育て上げた。前島もその流れをくむ職人(図4)から手ほどきを受ける。[9] カシロダケ 福岡県八女市周辺のみに生育するマダケの変種で有明のノリの養殖の支柱に用いられ、竹皮は草履表の材として全国で高価に取引された。江戸時代より、久留米藩のご禁制により保護されていた。高崎でも南部表の材料として取引されていたと笹本竹皮工芸所に伝えられている。

[10] ミラテス(1933~1943)(1935~1943)先に軽井沢店があった。タウト製品を販売する為に銀座にも同名の店をオープン。

[11]群馬工芸所 1936年4月井上とタウトの工芸品製作をさらに地域に根づかせようとしてドイツ工作連盟のような組織を目指して創設された公的機関。県工業試験場高崎分場の跡地に新設された。

[12] ドイツ工作連盟 1907年ミュンヘンで結成された。芸術と工業の積極的な協力と、その協力を実現することによるドイツ製品の質の向上を理念に掲げ家庭電化製品の実現において成功をおさめている。タウトは1910年に参加。

[13] 芸術労働評議会 1919年、革命の後にグロピウスとタウトを中心に結成された。後のバウハウス設立の母体となった活動だった。

[14] 蔵田周忠(1895~1966)分離派建築会の一員。1930年ドイツを訪れたことから、タウトの作品やバウハウスの紹介に努める。井上とタウトの協力者。

[15] 眞井邦雄 (1913~1944) 東京高等工芸学校図案科室内装飾専攻。少林山でタウトの助手を務めた三人の学生の一人。後にタウトが評価した京都の宮崎家具店に就職した。三菱航空機名古屋製作所にて直撃弾をうけて戦死。



図5



図6



図7



図8

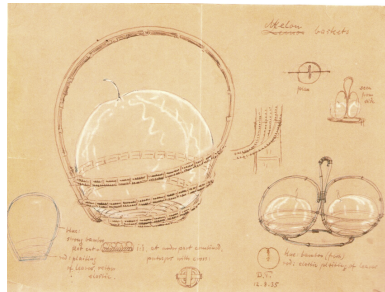


図9



図10

何糞やるぞと思った。再び仕事は始められた。一本の線は物凄い気迫で一氣に紙の上に描かれたのである。・・・中略・・・自分達が図面を描く気持ちはこの時に一変されたのである。」（眞井忠雄提供資料より）まさに高崎での小バウハウスの実践が始まったのである。

・竹皮編みに見られるタウトの理念

タウトが手掛けた 工芸品 の中で竹皮編みに特に注目される点が見られる。それまで高崎になかった新しい工芸であることや高崎南部表の職人とコラボレートして作り上げたものであることなどが他の工芸品との違いである。次に竹皮編み作品やデザインに見られるタウトのデザイン理念を探ってみる。

- ①地域にある素材、木や竹を用いてブリコラージュしている
- ②強度や構造、規格寸法等、建築の考え方を取り入れている

- ③機能と美しさを追求している
- ④色彩を施している
- ⑤表現主義的な有機的なデザインを施している
- ⑥質の深化を追求しているなどの点がタウトの理念の特徴としてあげられる。次に①～⑥について補足説明をする。

①では実物資料のヤーンバスケット（図5～7）や裁縫籠（図8）、メロンバスケット（図9）のデザインなどに木や竹皮が用いられていることから、タウトが地域にある素材を最大限に生かして使おうとしていることがわかる。この理念はレヴィ・ストロースのブリコラージュの考え方と等しい。バウハウスの预备課程の材料研究のカリキュラム（図10）にも同じ方向性が見られる。

- ②の考え方は建築の構造や強度の発想を籠に応用したものである。竹皮編みの籠の構造を強化する為に底に木を用いている点は独特である。ちょうど建築物を作る時の基礎を打つ考

え方にあたる。これも実物資料のヤーンバスケット、裁縫籠、メロンバスケットのデザインなどに見られる底板を用いる点がそれである。

③では機能を満たせば美しい形、プロポーションを得られるという考え方でそれぞれの籠に用途を示す名称例えばヤーンバスケット、裁縫籠、メロンバスケット、ワインホルダー（図11～13）等が与えられている。このことから竹皮編みの機能により暮らし方への提案がなされていることがわかる。ワインを寝かせてテーブルの上で注ぐことができる機能を持たせたワインホルダーなどがそれである。

④ではタウトはマクデブルクやベルリン（図14,15）の色彩を生かした集合住宅で有名である。一方でバウハウスの色彩教育は重要なカリキュラムの一つである。竹皮編みでは、裁縫籠やヤーンバスケットの内側に施された鮮やかな色彩（図16）や椅子の座面（図17）の二色の編み込み模様などにタウトの遊び心が見られる。

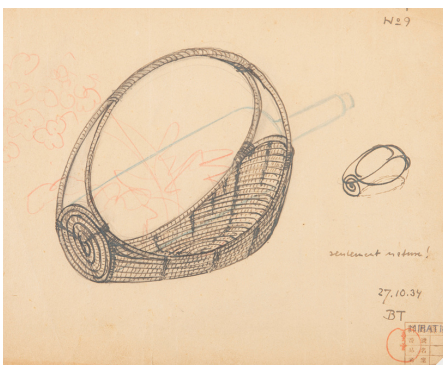


図11

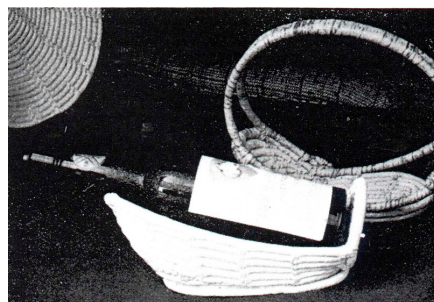


図12



図13



図14



図15



図16



図17



図18

⑤のタウトのデザインはトルコのミマール・シナンのモスク（図18）のフォルムが想起される。

また、メロンバスケットやワインホルダーなどの優美なラインにも表現主義的なデザインを読み取れる。

⑥についてはタウトに日本文化の簡素美や精神性を吸収して咀嚼し自分の表現に取り入れようとしている姿勢がみられる一方で日本の伝統工芸を高く評価したタウトは工芸品の質の向上のために職人による手仕事を採用している。

タウトのデザインした三次曲面の椅子の背もたれや座面の複雑な職人技を必要とする編み込み模様などがそれである。

タウトは竹皮編みについて「小さなものの中に小宇宙がある。」という理念のもとに工業製品でない日本の職人の技術を生かして質の高い竹皮編み製品をデザインしている。

・最後に

以上、タウトの遺した竹皮編み作品の実物資料やデッサンを概観してみるとタ

ウトの青年期の表現主義的なデザインがみられることがわかる。これはヴァイマル時代のバウハウスの初期の頃の表現方法と似ている。自由な表現を目指すため既成の美術教育から脱却を図ったバウハウスの教育は感性を磨く教育だった。タウトは高崎で自由な感性を育てる教育を行っている。また、訪日後のタウトの表現は日本文化の深い咀嚼により独自の表現に変わってきていると思われる。タウトは高崎にある南部表の竹皮を生かしながら職人の手技を用いて新技法を確立し、新しい工芸品「竹皮編み」を産み出した実践者なのである。

柳宗悦への「工芸についての手紙」にタウトは次のように記している。

「日本では今日も尚仕事についての非情な熟練というものが実際にものを作る場合に生きてはたらいっており、それが古くからの日本のものの品質をたもちかつそれをたかめているものだという事は、一向世界に認められていないように思われるという事です。」(新かなづかいで表記) タウトは西欧の模倣をやめて日本の

伝統的な工芸を大切にしてほしいと願ったのである。そして、仙台に続いて高崎でも[16]モダンデザインの原理を伝えている。タウトが蒔いた種は仙台では日本のデザインの基礎を作った剣持勇や豊口克平等、高崎では水原徳言、竹皮編みの職人等に引き継がれ「西上州竹皮編み」は伝統工芸としても今も続けられている。

[16] モダンデザインの原理1933年11月～1934年3月まで仙台商工省工芸指導所でタウトは工業生産のための規範原型を作るデザイン手法を指導。高崎ではそれをより実践的にやっている。

参考資料

ブルーノ・タウト著書

- 「工藝50号」日本民藝協会1935
- 「タウト全集第三巻美術と工藝」篠田英雄訳（育生社弘道閣1943）
- 「日本の藝術」篠田英雄訳（育生社弘道閣1946）
- 「日本—タウトの日記」全三巻篠田英雄訳(岩波書店1975)
- 「都市の冠」杉本俊多訳(中央公論美術出版2011)
- 「タウト建築論講義」沢良子,落合桃子訳（鹿島出版会2015）

展覧会

- 「ブルーノ・タウトのすべて」展図録（武蔵野美術大学，国立国際美術館，宮城県立美術館1984）
- 「ブルーノ・タウトの工芸と絵画」展図録（群馬県立歴史博物館1989）
- 「ブルーノ・タウト1880-1938」展図録マンフレッド・シュパイデル監修（セゾン美術館,京都国立近代美術館1994）
- 「パトロンと芸術家—井上房一郎の世界」展図録（群馬県立近代美術館1998）
- 「渡辺カリビングデザインの革新」展図録（東京国立近代美術館2006）
- 「モダンデザインが結ぶ暮らしの夢」展図録（高崎市立美術館,仙台市博物館,パナソニックミュージアム2019）
- 「ブルーノ・タウト—桂離宮とユートピア建築—」展図録マンフレッド・シュパイデル監修（ワタリウム美術館2007）
- 「ブルーノ・タウトの工芸—ニッポンに遺したデザイン—」展図録（リクシルギャラリー2013）
- 「ブルーノ・タウトの世界」展図録（群馬県立歴史博物館2021）
- 「東北へのまなざし1930-1945」日本経済新聞社（岩手県立美術館,福島県立美術館,東京ステーションギャラリー2022）

雑誌、特集

- 「仕事への道」井上房一郎（建築画報第23巻第6号）
- 「高崎の竹皮編とタウト」水原徳言（民藝第44号1956）
- 「特集ブルーノ・タウトと群馬」（上州路No.16 あさを社 1975 9月）
- 「特集ブルーノ・タウト再考1933-36年滞日期間の活動を中心に没後40年記念特集」（SD 171号鹿島出版会1978,12月）

その他

- 「群馬工藝所要覧」群馬県工藝所（1937年10月15日）
- 「群馬工藝」群馬県工藝所（1938年5月）
- 「婦人の窓 私の仕事—ある工芸品の製造—KRT放送脚本No. 9520 1960」
- 「手仕事百態」加藤秀俊文 白崎俊次写真（淡交社1967）
- 「高崎デザイン100年史」（高崎デザイン振興会1979）
- 「タウト芸術の旅」土肥美夫（岩波書店1986）
- 「ブルーノ・タウト」高橋英夫（新潮社1991）
- 「竹コミ」竹皮編工房・でんえもん（1号,2号,3号,4号,5号,6号 1988,1989,1989,1990,1990,1990）
- 「バウハウスと茶の湯」山脇道子（新潮社1995）
- 「BAUHAUS」マグダレーナ・ドロステ（タッショント・ジャパン2008）
- 「建築家ブルーノ・タウト—人とその時代,建築,工芸—」田中辰明・柚本玲（オーム社2010）
- 「ブルーノ・タウト—日本美を再発見した建築家—」田中辰明（中公新書2169 2012）
- 「ブルーノ・タウトと建築・芸術・社会」田中辰明（東海大学出版会2014）
- 「もっと知りたいバウハウス」杉田佳穂(アートビギナーズ,コレクション 東京美術2020)

研究論文

- 「高崎における近代工芸運動の考察Ⅱ—工芸運動の経過—松本久志(横浜国立大学教育紀要1978)
- 「ブルーノ・タウト 思维方法に関する研究」ムラツ・ドンダル（京都大学2006）
- 「竹皮編と近代」寺澤知実（多摩美術大学卒業論文2010）
- 「竹皮編—カシロダケが結ぶネットワーク」前島美江（財団法人工芸財団・日本工芸技術協会INDUSTRIAL ART NEWS No.38 産業工芸研究No.20 2011）
- 「群馬県立歴史博物館所蔵『ブルーノ・タウトデッサン66枚について』伊藤香織(群馬県立歴史博物館紀要No.34 2013)

図版提供

群馬県立歴史博物館(図5,6,7,8,9,11,16)、田中辰明(図14,15,18)、リクシルギャラリー(図17)

図版出典

- 「竹コミ5号」(図3,4)、「もっと知りたいバウハウス」(図10)